

三四郎

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1908) 「朝日新聞」

監督：中川信夫 (1955)

出演：小川三四郎 山田眞二
里見美禰子 八千草薫
野々宮宗八 土屋嘉雄
廣田先生 笠智衆

脚本：八田尚之

撮影：玉井正夫

音楽：斉藤一郎

佐々木与次郎 江原達怡

「然し是からは日本も段々発展する
でせう」「亡びるね」

『三四郎』は明治四十一年九月から年末にかけて朝日新聞に連載された。同紙連載の夏目漱石作品としては『虞美人草』『坑夫』『文鳥』『夢十夜』の次である。

田舎から都会へ出てきた青年が池の畔で美禰子と出逢う。「迷子の英訳を知っていらしって」などという生意気な女だが、三四郎に恋心が芽ばえる。相手も好意を抱いているようにみえたが、結局、女は別の男と結婚する。三四郎は口の内で迷羊（ストレイ・シープ）、迷羊と繰り返した。

当時の汽車は上りが名古屋留まりだった。三四郎は上京する時、前の座席の女に頼まれて、同じ宿屋の同じ部屋で寝たことがある。やむをえず、シーツの端をぐるぐる巻いて、蒲団の真中に白い長い仕切りをこしらえた。

翌日、別れるとき、「あなたはよっぽど度胸のない方ですね」と言われてしまった。このセリフを美禰子のような女が遠まわしに英語で表現すれば「ストレイ・シープ」になるのかもしれない。

青春文学の古典だが、日露戦争が終わって三年目の戦後文学でもある。名古屋で一泊後、東京行きの汽車で隣り合わせた男が「日本には富士山以外に自慢するものは何もない」と言った。「然し是からは日本も段々発展するでせう」と三四郎が反発すると、男は「亡びるね」と、愛国心に水を



三四郎

映画文学人生論

さすような発言をした。

この男は廣田という高等学校の教師で、美禰子にも英語を教えていることが後でわかる。世の中にいて世の中を傍観している偉大なる暗闇のような教師だ。

美禰子の周辺には三四郎のほかに、物理学者の野々宮や画家の原口などの崇拜者がいたが、美禰子は、彼等以外の人物を結婚相手に選ぶ。

三四郎は教会の会堂（チャペル）の前で美禰子に逢い、「結婚なさるそうですね」と聞く。美禰子は「ご存じなの」と云いながら、ややしばらく三四郎を眺めた後、かすかに溜息をもらし、「我は我が咎（とが）を知る。我が罪は常に我が前にあり」と聞き取れない声で云った。

三四郎には美禰子がわからない。廣田先生は、美禰子のことを「あの女は落ち着いて居て、心が乱暴だ」とか、「一種の露悪家」で「偽善を行うに露悪をもつてすると評する。

昔の偽善家は、何でも人に善く思われたいが先に立つが、新種の偽善家（露悪家）は人の感觸を害するために、わざわざ偽善をやるといふ。

『虞美人草』の甲野の継母は昔の偽善家で、美禰子は新種の偽善家だ。三四郎は、アンコンシヤス・ヒポクリット（無意識の偽善者）に翻弄されて、ストレイ・シープに甘んじるしかなかった。

三四郎池の畔に迷羊